

パレンバン王国の対外関係

——一七世紀を中心として——

鈴木恒之

はじめに

かつてファン・レウールはインドウー期インドネシアに見られる国家の二類型としてジャワ型国家とスマトラ型国家なる概念を提起した。⁽¹⁾これはその後ベンダらによって東南アジア全域に対しても適用され、内陸農業国と沿岸交易国なる概念へと敷衍された。⁽²⁾この沿岸交易国の概念を簡略にまとめると、河口または海に近くの河川沿岸に位置し、権力と富の源泉を東南アジアの国際貿易または地域貿易と海軍力におおぐ商業・海上権力⁽³⁾と言える。だが、これにはシュリーヴィジャヤ王国のように他の沿岸交易国を多数支配下に置いた大帝國から、逆に他に従属し、あるいは自立しながらもごく小範圍な地域的交易に参加するしかない弱小國までが含まれる。むしろ後者の方が歴史上は一般的であったと考えられる。そしてこれら沿岸交易国はマライ半島及び中・東

部ジャワを除く西インドネシアに特に顯著に存在していた。

本稿の目的は、これら沿岸交易国が一六世紀以降激動を続けるマライ・西インドネシア地域の中で、他勢力といかに離合集散し、特に一七世紀以降この地域に登場した異質の商業・海上権力であるオランダ東インド会社に対峙したかを、一つの典型的な沿岸交易国であるパレンバン王国の事例を通して具体的に探ることにある。

本稿で扱うパレンバン王国はスマトラ南東部に位置し、ムシ川河口から約八〇キロメートル上流の港市パレンバンを拠点に一六世紀後半に成立し、一九世紀初めオランダによって占領されるまで続くイスラム王国である。以下本論に入る前に、同王国成立前のパレンバン地方の歴史についてごく簡単に述べておこう。

このパレンバン地方は通説に従えば七世紀後半から一四世紀後半まで西インドネシアとマライ半島に覇を唱えたシュリーヴィジャヤ王国の故地で、港市パレンバンは一一世紀半ば頃までその王

都が置かれていた。⁽⁴⁾その間同地は東西貿易の中継基地として、また東南アジア海域内貿易センターとして繁栄を極め、一一世紀半ば以降、王都のジャンビへの移転、また王国自体の衰微に伴い貿易港としての重要性は徐々に失われはしたが、それでもなお一四世紀半ばまでかつての余光を保ち続けた。⁽⁵⁾

一四世紀後半になるとジャワのマジャパイト王朝により占領されるが、同王朝はその後しばらくは当地に有効な支配を及ぼせず、ためにパレンバン地方は支配権力不在の状態に陥った。この機に乗じ華僑海賊・商人集団が当地に一大勢力を築き、盛時には万をもって数うべきほどの社会集団を形成した。これは本国明王朝に通貢し、一五世紀初め集団首長が旧港宣慰使に任じられたりもするが、その独立的活動は同世紀中期に全く失われてしまう。それは明王朝の海禁政策の厳重施行とマジャパイト王朝によるパレンバン支配の本格化によったと考えられている。⁽⁷⁾しかし、このマジャパイト王朝によるパレンバン支配に関しては今日なお詳らかにされていない。⁽⁸⁾

そのマジャパイト王朝の支配から一五世紀末に脱したデマ王国は、独立後すぐにパレンバンの支配権も奪取してしまう。⁽⁹⁾一五二一・一三年ジャバラの領主パテ・ウヌスがポルトガルによる占領間もないマラッカを攻撃するが、その艦隊組織のためにパレンバンの首長達にも大動員がかけられた。その結果パレンバンは攻撃失敗による被害に加え、その後のポルトガル軍の報復の的とされ、大変な破壊を受けることになった。⁽¹¹⁾この破壊の結果パレンバンが相当のダメージを受けたことは想像に難くないが、詳細は不

明である。また、以後一六世紀後半のパレンバン王国建設に至るまでの歴史についても具体的なことは何も知られていない。

一、バンテン王国に抗して

パレンバン王国の成立経緯についてはこれまで同地方に残された各種歴史伝承を基礎に考察が加えられてきた。⁽¹²⁾その現在までの成果はデ・フラーフとピジョーによりまとめられている。⁽¹³⁾それにより以下簡略に紹介してみよう。

一五四九年にデマ王国の第四代国王パンゲラン・プロウオトを討ったジパンの領主アルヤ・パナンサンは、同年のうちにやはりパジャン領主ジョコ・ティンキルによって討たれた。残されたパナンサンの一族・家臣はパジャン軍の追求を逃がれてスラバヤへ落ち延び、その後キヤイ・ゲデン・スロ一世に率いられた一行がパレンバンへ渡った。スロ一世はその後ジャワで死を迎えるために去り、その弟であるキヤイ・ゲデン・スロ二世が国王となって一五七三年頃から一五八九年まで支配した。⁽¹⁴⁾デ・フラーフらの叙述からは、スロ一世が既に国王となったか否かは明確でない。ただ、歴史伝承にはスロ一世には全く触れず、明らかにスロ二世にあたるキアイ・ゲデン・スロがスラバヤからパレンバンに渡来し、一五七三／四年に王となったとするだけのものもあり、この王家のパレンバンにおける実質的な支配権の確立はその一五七三／四年以降と考えて良いと思われる。

ところでこの当時パレンバン王国は西インドネシア海域の通商

交易上いかなる位置にあったろうか。前述した一五一三年のポルトガル軍による報復攻撃はその港市に直接的な破壊をもたらしたろうが、そのポルトガルがマラッカを占領・支配したことによって生じたその後のマライ・インドネシア海域での通商交易の変動は、更に大きなダメージをパレンバンに与えたと考えられる。

これまで多くの指摘があるように、ポルトガル人の強制する高関税等を嫌い、多くのアジア貿易商人がマラッカでの取引を避けるようになったため、当時の西インドネシアにおける貿易航路に大きな変動が生じた。従来のバンカ海峡からマラッカ海峡へとこの航路より、スンダ海峡からスマトラ西海岸廻りの航路がむしろ一般的になったのである。⁽¹⁶⁾この貿易航路の変更において、スマトラ島西北端のアチェー港はこのルートの貿易船に絶好の停泊地として利用されるようになり、同港を根拠地とするアチェー王国が一五二〇年頃から中継貿易国として急速な発展をとげた。他方、スンダ海峡の利用増加は西部ジャワのバンテン港に中継港としての生長を促し、また後背地に産するコショウの供給が多くのアジア貿易商人を招き寄せたこともあって一六世紀半ば以降、バンテン王国は国際貿易国として隆盛に向かった。⁽¹⁷⁾

これら二港の発展は西インドネシアにおける国際貿易センターの多極化と共にマラッカ港の絶対的凋落を促すものであった。バンカ海峡沿いに位置するパレンバンは一六世紀当初マラッカ・ジャワ・東インドネシアを結ぶ主要な貿易航路上にあり、多分ジャワ米のマラッカ向け輸出入中継港として、またマラッカへの食糧供給地として繁栄していた。⁽¹⁸⁾そのパレンバンにとって、バンカ海

峡が幹線貿易航路から一つのローカル航路へ転落したこと、及びマラッカの絶対的凋落から当然生じた取引量的大幅低減は、まさにその繁栄を失わせる大打撃となったと考えられる。従って、外国貿易商人を特に引き寄せるに足るほどの産物を持たないパレンバンは、その王国創建当時、ローカル航路上に位置する弱小な沿岸交易国にすぎなかったと見てよからう。

さて、パレンバンはその南界をランポン地方のトゥランバワン地区と接している。ランポン地方は一六世紀後半にはかなりのコショウ生産地であった。けれども地方首長が各地に分立し、統一的な支配権力を欠いていた。地方首長らは紛争の仲裁依頼等を通じて、バンテン王国の支配下に入ったと言われるが、それはバンテン王国のハサヌッディン王（一五五二―一七〇年）の時代に比定されている。⁽²⁰⁾これに従うならば、バンテン王国にとって自らの支配下に入ったばかりの、しかも豊かなコショウ生産地の隣りに、新勢力パレンバン王国が登場したことは大いなる脅威であり、警戒するのが当然である。

一五九六年初め、このバンテン王国が二〇〇隻から成る大艦隊をもって成立間もないパレンバン王国に来襲した。この遠征の原因として『バンテン年代記』は次のように述べている。デマ王家の正系を自負するパンゲラン・マスがバンテン国王モラナ・ムハマッドの師に迎えられた後、パレンバン王スロはもと彼の従者（奴隷）でありながら、久しく彼に表敬訪問を欠いているのは無礼である故、このスロを国王に献上するから、パレンバンを侵攻するように、と献議した⁽²¹⁾というのである。だが、既に述べたように

これはバンテン王国がランポン地方に対するパレンバンからの脅威を警戒することから起ったと考えるのがごく自然であり、バンテン王国がランポン地方支配の確立、更には東海岸沿いに北上しパレンバンを制圧、究極的には当時の有力なコシヨウ市場たるジャンビ地方領有を意図したものと解釈されている。⁽²²⁾ 結局、この遠征は国王の戦死により失敗に帰す。だが、それ故にバンテンのパレンバンに対する敵意は一層募り、一六〇五年にも失敗に終わったが遠征艦隊を派している。⁽²³⁾ また、この当時来港したオランダ人にもパレンバン遠征への協力を再三要請しては断わられている。⁽²⁴⁾

これに対しパレンバン王国のとった防衛策は先ず隣国ジャンビとの同盟である。スマトラ島のコシヨウ独占を企図したアチェー王国は、一六世紀後半以来スマトラ西海岸の主要なコシヨウ供給地を征服し、更に東海岸へその侵略の方向を転じてきた。このアチェー王国の脅威に対し、東海岸の交易国シアク、インドラギリ、ジャンビ、パレンバンの各王国はアチェーの宿敵、マレー半島に位置するジョホール王国の主導権の下、一六一五年当時既に対アチェー防衛同盟とも言うべき関係を結び、王家相互間の婚姻関係によって結束を固めていた。⁽²⁵⁾ もちろんパレンバンとジャンビの両王家間にも前者の王女と後者の王子とが結婚し、⁽²⁶⁾ その絆を強化していた。この同盟は総体的に見ればアチェーを対象としたものであることは間違いないが、⁽²⁷⁾ ことパレンバンに関しては最も脅威であったのはアチェーよりもむしろバンテンであり、ジャンビとの同盟関係には対バンテン防衛同盟の含みも十分にこめられていたと考えて良からう。⁽²⁸⁾

パレンバン王国が、一六〇三年以来敵国バンテンに商館を構え、それと親好深いオランダ東インド会社（以下会社と略す）にさえ接近を図ったのもこの対バンテン防衛策に苦慮していたためである。一六一五年一二月の報告でクーンは、パレンバンは「バンテンの敵である。パレンバン国王は我々の友好を非常に求めており、バンテンの王も彼らのためにこの彼らの敵を従えてくれることを望んでいる」と書いている。⁽²⁹⁾ 一七年に初めて会社が上席商務員ラームブルフをパレンバンへ派遣した際も、国王は会社がバンテンと友好関係を破棄することを強く望んでいる。⁽³⁰⁾ また一九年に会社がバンテン王国と完全に敵対関係になった後、バンテン王国の特使がマラッカに支援を要請に行くのを知るとそれを会社の艦隊に通報し、それらに補給を与え、その特使を捕えることに大いに尽力した。その結果、会社は友好維持とその後の必要な処置をとるために一人の商務員補をパレンバンに置くことになった。⁽³¹⁾ けれどもこの際設置された事務所は二一年に廃止されている。それは可能な限り取引をいくつかの拠点に集中させ、他の商館は廃止させるという当時の総督クーンの政策に基いている。⁽³²⁾ 当時のパレンバンは会社社員を駐在させて置く必要がないほど取引量が少なかったと言えよう。つまり、会社の最も求めていたコシヨウをほとんどパレンバンは供給できなかったのである。一五年当時のスマトラにおけるコシヨウ供給地に関し、クーンは次のように報告している。

コシヨウはスマトラ地方中部の山地で栽培されており、そこにはミナンカバウ人という種族が居住し、彼らの収穫物をい

くつかの河川によって運び出し、外地人と織物、塩及びあらゆる必需品と交換する。すなわちスマトラ西海岸ではプリアマン、ティクーその他に、最上質の物が来る。他方東海岸ではパレンバン、ジャンビ、カンパルその他へ来る。しかしジャンビの川が彼らにとって最良の位置にあるらしく、最大の量がそこにもたらされる。⁽³³⁾

ここには確かにパレンバンの名も上げられているが、ジャンビに比すれば無に等しいと言っても過言ではないほど少量しか供給できず、会社はパレンバンに全くコショウを期待していないのである。⁽³⁴⁾

以上のようにパレンバン王国は主としてバンテン王国に対する安全保障としてジャンビ及び会社と結ぶことに努めてきた。けれどもジャンビはスマトラ東海岸随一のコショウ供給地とはいえ、バンテンに比較すれば弱小に過ぎた。会社も一九年にバンテンと決定的な敵対関係に入るまでは、会社の貿易にとっての重要性を考えれば全然あてにはできなかった。それ故パレンバン王国がこれらと並行して、更に中部ジャワの強力な新興勢力マタラム王国との関係を求めたのも誠に当然のことであった。パレンバン国王は一七年初め会社に対し、パレンバン住民の船がマタラムへ自由に通行するのを認めるよう要求して、その同意を得ている。⁽³⁵⁾これはパレンバン住民が当時この方面との交易を行っていたことを示している。そして、マタラム王国が中部ジャワ最後の独立勢力スラバヤを陥した二五年、初めて使節を派遣した。この使節派遣の意図は、マタラムがバンテンを次の征服目標に据えたことを知り、

バンテンに対抗するための協力関係を申し入れることにあった。⁽³⁶⁾結局、両者共同のバンテン攻撃は実現しなかったが、この使節派遣を機にパレンバン王国はマタラム王国の宗主権を認め、これに臣属し、貢納するという関係に服することになった。これはジャワ王朝を中心とする支配体制下に入り、その保護を受けるといふ、言わばマジヤパイト王朝以来の伝統的主従関係の復活とも見られる。⁽³⁷⁾

この結果、パレンバン王国の対外関係は以後かなりの期間、このマタラムとの主従関係によって大きく規制されることになる。マタラム王国は二五年以来バンテンへ向けていた鋒先を突如バタヴィアの会社へと転じ、二八・二九年と二次にわたるバタヴィア包囲攻撃を行った。このマタラムと会社との敵対関係はそのままパレンバンと会社との関係にも引き移され、パレンバンは会社を敵とすることを余儀なくされた。次節ではこの両勢力の間で動揺するパレンバン王国の対応を追うことにするが、その前にもう一つパレンバンにとっての新しい敵の出現について見ておく必要がある。

既に述べたようにパレンバン王家とジャンビ王家とは互いの同盟強化を目的に婚姻関係を結んでいた。ところが皮肉なことこの婚姻が逆に両者の敵対を導くことになった。二七年パレンバン国王が亡くなると、⁽³⁸⁾故王の女婿にして甥であるジャンビの王孫、パンゲラン・アヌムが結婚の際の約束により自らに継承権があると主張した。これに対し、パレンバン側はこの主張を全く無視し、⁽³⁹⁾故王の弟を即位させた。⁽⁴⁰⁾ジャンビは主張を容れられなかった

だけでなく、アヌムが侮辱を受けたとしてパレンバンへの報復を叫び、蘭英双方の東インド会社に支援を求めた。両者共にこれに応じて三隻ずつの艦隊をパレンバン河口へ派遣し、ジャンビの六〇隻の艦隊と共にこれを威嚇した。けれどもジャンビ王が武力行使よりも談合による解決を望んでいたため、戦闘行為には至らず艦隊は引き揚げた。⁽⁴¹⁾だが、両者の敵対はその後も続き、二九年アヌムを退けて即位したパレンバン国王が暗殺され、⁽⁴²⁾その弟が後を継いだ時に、やっと和解が成立した。⁽⁴⁴⁾

ところが、三六年このパレンバン国王が継子を残さずに亡くなると、またもやジャンビはアヌムの継承権を蒸し返した。この主張は結局実らずに終るが、それはジャンビの武力的脅威にもかかわらず、パレンバン王国の貴族・高官がこぞってこれに反対したためである。そして彼らが強硬に反対したのは、マタラム王国の宗主権を認めていないジャンビに屈し、その国王を自らの国王として受け入れれば、マタラムの怒りを誘うが必定であると恐れたためだと言われる。⁽⁴⁶⁾この王位継承権問題は四一年にアヌムが死亡することによって終結するが、この問題によって生じた両者の不和は、ジャンビが既にパレンバンにとって常に安全な盟邦ではなく、時に応じて顕在化してくる潜在的な敵へと転化したことを意味する。こうしてパレンバンは少くとも四一年までバンテンと反対側の隣りにもう一つの敵を持つことになったのである。

二、マタラムと会社の狭間で

三〇年代前半パレンバンは会社を敵とする宗主国マタラムの対外政策に忠実に従っていたようである。会社はそのマタラムとの親好に神経を尖らしており、三三年にはパレンバンからマタラムへの特別使節の乗船を拿捕している。⁽⁴⁷⁾三四年会社はバンテンとの和平交渉において、パレンバン国王は「マタラムの臣下であり、マカッサル人やポルトガル人の友人」ときめつけ、同国への襲撃を提案しているほどである。⁽⁴⁸⁾

けれども、マタラムはパレンバンに対しなお不満があったらしく、三四年マタラム艦隊がパレンバンを懲罰しようとしていると噂がジャワから伝わった。⁽⁴⁹⁾その噂は三六年初めにマタラム艦隊がパレンバン港へ押し寄せたことによって事実となった。別に懲罰行動は無く、単なる勢力誇示で終わったが、噂だけでも十分脅しになったのであろう。三五年末からパレンバンへ来港するバタヴィア商人に対する差別に関し、⁽⁵¹⁾何度も会社からパレンバンへ抗議がなされるようになった。⁽⁵²⁾それと同時に会社と敵対あるいは競合関係にあるポルトガル人やカンボジアやパタニの中国人商人の来港・通商も目につくようになった。⁽⁵³⁾

それにもかかわらずマタラムは更にダメを押すかのように、三六年八月にもまた使節を送り込んでいる。⁽⁵⁴⁾そして三八年、マタラムは二年前にジャンビの干渉を排して即位したラデン・トゥマンガに正式のパレンバン国王としての承認を与えた。⁽⁵⁵⁾このマタラ

ムのパレンバンに対する頻繁な接触がいかなる意図をもって為されたか史料的に確かめえないが、少くとも三八年にパレンバンがランポン地方トゥランバワン地区へ行った侵略との関連性は考えられる。⁽⁵⁶⁾ マタラムが仇敵バンテンのコシヨウ倉とも言うべきこの地区を、宿敵パレンバンを焚付けて侵攻させたことは十分に肯ける推測である。

ところが、マタラムに対し前述のように非常に忠実な姿を一方で見せながら、パレンバンは他方で会社にも迎合的な姿勢を示すようになる。三六年八月、会社は使節をパレンバンへ送ってバタヴィア商人に対する差別政策を撤廃するよう要求した。国王はそれに応えて、常にオランダ人との友好関係を保つ意志は持っているが、一五〇隻の艦隊で来港したばかりのマタラムに対する大きな恐怖もあることを述べ、マタラムの侵略から彼を守るような取引所、いわば要塞的取引所⁽⁵⁷⁾を建設することを要請した。そしてその見返りに同国で得られる全てのコシヨウをオランダ人にのみ引渡す協定を結ぶ用意のあることも示した。⁽⁵⁸⁾ マタラムの保護を受けながらもその侵略を恐れ、マタラムの敵たる会社にその侵略に対する安全保障を求めたのである。

会社はこの要請に対し慎重な態度で臨んだ。商館や取引所の数を可能な限り少く抑えるという方針によるのはもちろんだが、パレンバン国王の態度の余りの急変にその真意をはかりかねたのがその一因である。当座の対処はパレンバンにおけるコシヨウ取引⁽⁵⁹⁾きについて調査をし、当地のコシヨウ独占を目指すイギリスの試みを妨害する程度に留まった。だが、その後バタヴィア商人の差

別が止み、彼らによるコシヨウ取引も徐々に拡大したのと、国王からも引続き要請が為されたため、会社もこの問題につきパレンバンと協議を持つようになった。

この協議が具体的な進展を見るのは四〇年になってからである。国王は協議において、会社が社員を常駐させ、家屋を建ててそこに八門の大砲を据え付け、ポルトガル人、マタラム人、その他盗賊とか国王及び会社の敵に備えることを求めた。⁽⁶⁰⁾ 会社はパレンバンの意図を、彼ら自らが「国王の敵」として措置しているのはマタラムよりもむしろジャンビ、バンテンであり、それらに対する安全保障がこの要請の主たる狙いであると考えていた。⁽⁶¹⁾ 換言すれば、バンテンはともかくジャンビの名を出せば初めから会社がこの要請を拒否することは明白であるから、会社の明確な敵であるマタラムを共通の敵に据えることで会社の取引所を設置させ、それを担保にマタラムよりもむしろジャンビ、バンテンの侵略に対して支援を得ようとした策である。⁽⁶³⁾ それと同時に、これによって会社との直接的取引が開始されるわけで、それを通じて地域交易におけるパレンバンの地位を向上させ、交易国としての飛躍を図る考えもあったことは容易に推測し得る。

この取引所設置は四〇年後半から話し合われており、それに対する合意の仮協定が四一年六月に結ばれている。⁽⁶⁴⁾ だがこの協定にもかかわらず、会社はそれを建設しようとする意志は毛頭なかった。それは四一年つまり仮協定と同年に決定されたこの問題についての会社の基本方針によって明確である。それにはこうある。

「パレンバンの——引用者」王は非常に我々を頼りにしてい

るようである。継続的な社員の駐在と取引所建設を強く求め、そのための土地を用意し、多くの自由を認めた。「中略」しかしながら我々の考えでは、そこに公式の商館を建てるのではなく、友好を維持するために余り経費を要さない家屋を仮に建てる。しかし原則的に全てのコシヨウがバタヴィアへ運ばれること、我々の船で運ぶのではなく、「会社以外の引用者」船での取引を続けること、取引所を単に壺の覗き口としてのみ保持し、「国王の安全保障の——引用者」担保とさせないことによって利益をはかる。⁽⁶⁵⁾

コシヨウは独占するが、国王の求める安全保障の担保、具体的には要塞としての取引所は、現地君主の権力を会社の危険負担で保障するものであるから、これは認めないという何とも虫のいい方針である。

敵に対する安全保障を得たいという国王の最も望む条件を全く否定する方針を立てながら、会社は表面上その希望に副うかの如き態度を示し、更に詳しい条約締結のための協議を続けた。けれども国王はこの欺瞞的な会社の意図を見抜いていたと考えられる。四二年二月、四一年六月の仮協定で明確に両者の敵と規定したそのマタラムの宮廷へ国王自らが表敬訪問へと旅立ってしまったのである。⁽⁶⁶⁾この時点で条約締結の意志を棄てたと考えてよからう。

ところが事態は国王の帰国後一〇月に急転する。会社はさすがにこの国王のマタラム表敬訪問を重大な問題として受けとめ、七隻から成る艦隊をパレンバンへ向けて派遣し、会社の敵であるマ

タラムと手を結ぶのか、それとも会社と友好関係に立つのか、態度選択を迫ることにした。この艦隊は偶々一〇月五日バンカ海峡で、パレンバン国王の帰国に随伴して来たマタラム艦隊と遭遇し、「奇妙な勝利」を得る。⁽⁶⁷⁾単に会社の艦隊の偉容のみでなく、その艦隊が目前で国王に因縁浅からぬマタラム艦隊相手にあげた戦果が、パレンバン国王のマタラムから会社への逆転傾斜を強く促したのである。一八日に交渉を始め、提案された条約案にはとんど変更を加えることなく、⁽⁶⁸⁾二一日にはもう条約に調印しているのである。

その条約は要約すれば以下のような項目から成っていた。

- ① 会社は四一年六月仮協定により取引所を建設する。
 - ② 会社社員・臣民のキリスト教信仰の自由。
 - ③ 会社社員・臣民の治外法権。
 - ④ 会社からの逃亡者の引渡し。
 - ⑤ 関税額の決定と取引きの自由。
 - ⑥ コシヨウ代金の前払い拒否。
 - ⑦ コシヨウの独占取引き。
 - ⑧ 会社駐在員の領事的権限。
 - ⑨ 全交易船への許可状交付と交易地制限。
 - ⑩ パレンバン領内での会社のマタラム船攻撃の自由。
 - ⑪ 永遠の同盟者として互いの敵を自らの敵として助け合う。⁽⁶⁹⁾
- 治外法権、許可状交付による交易地制限などで明らかにパレンバンに不利な内容がいくつか見られるが、「国王と総督及びオランダ国とは同盟者」⁽⁷⁰⁾と謳うなど、言葉・形式の上で両者は対等な関

係とされている。それに国王の最も望んだ取引所の建設、一方の敵は双方の敵とするという協力関係が取決められ、ともかくも文言の上では会社によるパレンバンに対する安全保障は得られたことになる。

けれども、会社にその気の無かったことは既述のとおり四一年決定の基本方針に明白である。会社は条約締結後も取引所どころか事務所も置こうとはしていない。⁽⁷¹⁾東のモンスーン期に会社の船を送り、取引きするのみであった。また国王の敵との対決に際する支援の約束でも、「必要性があり、会社の力が許し、状況が指示する」⁽⁷²⁾ような支援をすると、予め逃げ口上を条文の中に潜ませているのである。

そして、四六年には会社による直接のコシヨウ取引きも廃されてしまう。会社はこれ以前からパレンバンでのコシヨウ取引きについて常に不満を漏らしている。⁽⁷³⁾その主たるものは、国王がコシヨウを独占し、それを隠匿することで値を釣り上げることにあった。四六年に直接取引きを止める契機となったのも同様の事情によった。それは次の報告から明らかである。

パレンバンでのコシヨウを全て我々〔会社——引用者〕にのみ提供することを条件に、市場価格よりも一レアル高く支払うことを求めた。この独占は会社にとって損であると判断された。我々自身がそこから運ばなくとも、コシヨウは（日常的に見られるように）バタヴィアの中国人や他の商人達によって我々の所へもたらされることは十分確かなので、今年はパレンバンへ全く船を送らないのが妥当と考えた。⁽⁷⁴⁾

この会社の方針は以後一〇年ほど続けられた。

これによって四二年条約は全く反古同然と化してしまった。取引所の建設がなかったばかりでなく、会社の船すら来なくては国王の望む安全保障は全く得られないことになる。それ故、パレンバン国王がマタラム王国との主従関係を維持し続けたのは当然のことであった。会社取引所建設の意志のないことを知った国王は、会社船の派遣が止まる以前、四四年から既にマタラムへの遣使を復活させている。⁽⁷⁵⁾というよりはむしろ止めなかったと言うべきであろう。⁽⁷⁶⁾

その後、史料上で使節派遣を確かめられるのは少し間があいた五三年と五六年であるが、それまでの間もマタラムとの関係は良好に維持されていたことは確かであろう。⁽⁷⁷⁾更に、五七年にはマタラムがバリ島に対して計画した遠征に援軍を送り、⁽⁷⁸⁾臣属国としての任務を忠実に果たしている。

他方、この間のパレンバンにおける交易は明らかに以前よりも活発さを増している。条約締結によるバタヴィア商人の来港増加も上げられるが、最大の理由は四一年一月に会社がマラッカを占領したことによりバンカ海峡経由のジャワ・マラッカ航路が活性化したことである。当然パレンバンへの寄港船が増加し、それに刺激されてのミナンカバウ方面からのコシヨウ供給の増加、自国内でのコシヨウ生産の発展も見られた。次の報告はその一端を物語っている。

マラッカのコシヨウの大部分はパレンバンとインドラギリから、ほとんどがマタラムのジャワ人によってもたらされる。

東のモンsoonで〔パレンバンとインドラギリへ——引用者〕米と必需品を運び、コシヨウを積んでマラッカへ来る。そこから西のモンsoonでもう一度コシヨウを求めに行き、彼らはそれをバタヴィアで売り、代わりに織物を得て今度はマタラムへ持つて行く。こうして二重の航海をし、それによってマラッカ及びバタヴィアにおいて我々は多量のコシヨウと織物との大きな取引を得る。そしてジャワ人もそこから相応の利益を得ている。⁽⁷⁹⁾

これは当時のマラッカ・スマトラ南東海岸・バタヴィア・マタラムを結ぶ交易路におけるジャワ商人の活動を述べたものであるが、同時にこの交易路におけるパレンバンのコシヨウ供給地としての重要性をも十分に示している。⁽⁸⁰⁾

そしてこの交易量の拡大が五〇年代になると外国商人をパレンバンへ招来することになった。それと同時にこの地に対する会社の関心も急に高まった。五五年初め会社はパレンバンに中国商船が入港したことを知るや、コシヨウ買い付け妨害のため、四二年条約遵守を求める信書を国王に届けるために小艦隊を急派した。目的の中国船の他にクイナンからの三隻のジャンクを発見し、この三隻のうち一隻を没収、二隻を焼却するという実力行使で国王に条約遵守を迫り、今後会社自らもコシヨウ取引船を送ることを約束して、これを誓わせた。⁽⁸¹⁾ こうしてともかく会社船による直接のコシヨウ買い付けは復活した。

しかし、国王は会社による他国船への実力行使に多大な恨みを抱き、他国船へのコシヨウ売却を秘かに続けていた。国王自身は

彼より以前の王が結んだコシヨウ独占の条約に自分がしられることはないかと判断していたからである。⁽⁸²⁾ 五八年八月、会社は一隻のカンボジア船がコシヨウを買い上げたことを知り、それを没収しようとして再び実力行使に出た。その際これを阻止しようとするパレンバン人と小競合となり、会社軍が偶然に町へ向けて発砲する形態となった。これは五五年の実力行使に対する恨みと重なって国王の憤激を誘い、その二週間後にパレンバン軍が会社船二隻を計画的に襲撃し、駐在員オッケルスを初め多くの乗組員を殺害、あるいは捕虜とした。⁽⁸³⁾ これに対し会社は一月に艦隊を派遣して港灣封鎖をすると共に、捕虜の解放を求めたが無視された。五九年二月に港灣封鎖艦隊の交代を行った後、同年一〇月本格的な遠征軍を送り込んだ。会社の遠征軍は一月二日パレンバン河口に到着し、ほぼ一ヶ月でパレンバンの町を破壊し尽し、撤退した。⁽⁸⁴⁾

パレンバンの王族・高官らはムシ川上流に逃れ、各地に砦を築いてオランダ軍の更なる攻撃に備えていた。ところが、その最中に国王が死亡し、その継承権をめぐるお定まりの内紛が生じ、三勢力が鼎立する形勢となった。これら三勢力は互いにそのコシヨウ取引を妨害し合うなど小競合を続けていたが、その中から前王の弟、ラデン・トゥムンゲンが抜け出して来た。結局この内戦状態は六〇年一〇月ジャンビ王の仲介により、ラデン・トゥムンゲンが王位に即くことでいよいよ終止符が打たれた。⁽⁸⁵⁾ 新王は六一年前半頃までは会社に屈しようとはしなかった。同年四月マタラムへ使節を送るが、⁽⁸⁶⁾ それには彼への支援を要請する任務が託されていたろう。また、五、六月にシアムへ使節を派し、自由貿易

を求めたことも報告されているが、⁽⁸⁷⁾これも会社との対決策の一端と解釈してよからう。何とかして会社に対抗する方策を捜し求めていたものと思われる。

しかし、これらの策はいずれも成功しなかった。その上、新王即位を知った会社は新王の態度決定・和戦いずれを望むかについての回答を迫り、小艦隊による港湾封鎖を実行した。⁽⁸⁸⁾再び実力行使による屈服を強請したわけである。中国人商船等の来港もあり、⁽⁸⁹⁾交易復活も緒に着こうかという時のパレンバンにとってこれはかなりの痛撃であったようだ。国王は会社との和平を考慮せざるを得ず、六一年七月、五八年事件の生き残り捕虜二名を解放した。⁽⁹⁰⁾そして翌年五月シャバンダルをバタヴィアへ派遣し、和平条約締結の協議に当らせた。

三、会社への屈服

和平条約は六二年六月二九日、バタヴィアで調印されている。これは同時に四二年条約の改訂条約でもあった。その内容は四二年条約と比して以下の諸点に大きな変更が加えられている。①当然のことながら先ず両者の恒久的和平を誓っている。②両者の紛争の原因となったコシヨウの会社との独占的取引の件である。バタヴィア以外に実情に合わせてマラッカへの輸出を認め、⁽⁹¹⁾更に違反取引の事実を知ったなら国王はそれを妨げ、そのコシヨウを引渡させる義務を持つ。また会社はコシヨウ取引を求める者のために常に十分な支払い手段を準備しておく。③パレンバンで

のコシヨウ買い上げ価格を一ピクル当り現金で四レアル、商品なら四と二分の一レアルとし、関税及びその他手数料を免除する。④交易商人への許可状発行及びパレンバン商人の交易地制限条項の廃止。⑤マタラム等の敵に対する防衛協力条項の廃止。⁽⁹²⁾

これら改訂の特徴の一つは、先の戦争の結果により、四二年条約にまがりなりにも見られた同盟者の関係が廃され、交易におけるパレンバン王国の会社への従属が明確にされたことである。⑤によって会社は厄介な防衛協力義務を免れ、現地勢力間の紛争に否応なく巻き込まれる危険性を排除し、それらに対し全く自己の利益からのみ対応しうる位置に立った。そして②において、国王及びその臣民はパレンバンで得られる全てのコシヨウについて売却相手・輸出先を制限されたことは前条約に同じだが、国王は新たにその臣民の取引を違反を取締まる義務を課された。こうして、前条約において会社の防衛協力と引換えに与えた会社のコシヨウ独占権は、防衛協力義務が廃されてもなお維持されただけでなく、逆に国王に違反取締まりという義務が新たに課されたわけで、パレンバン王国の会社に対する従属性はここに明白である。そしてこの国王への違反取締まり義務の押し付けが④に上げた許可状政策条項の廃止につながったと考えられる。そもそも許可状政策は会社の独占取引を侵す密輸商人を排除する目的を持ち、これらのパレンバンへの適用は前条約に規定されたが、全く実施しえなかった政策である。許可状の発行・点検の任に当るべき駐在員を配備しなかったのであるからそれは当然である。しかるに、この六二年条約では取引所設置が改めて約束され、⁽⁹³⁾駐在員

も当然配備されるはずであるのにこの政策がとられなかったのは、取引き違反、つまり密輸の取締まりを会社でなく国王の義務として押し付けることで、会社がこれに要する負担を省こうとしたためであろう。換言すれば、会社が自ら同地での取引き違反を監視・取締まる労を取るほどには、取引き相手としてパレンバンを未だ重視していなかったことになる。

またこの改訂のもう一つの特徴は会社が③に見られるコシヨウ価格の固定化と関税等の免除によって交易の合理化を企図したところにある。価格固定の狙いは、国王が従来しばしば行ってきた出荷停止による価格騰貴工作を不可能にすることにあった。要言すれば、コシヨウの安値での安定確保策である。それと共に、この価格に関税その他取引きの各段階で要求される手数料を含めてしまふことにより、取引きの煩雑さ及びトラブルを避けたいとの意図もあったであろう。

しかしこの価格固定・関税等の免除は失敗に終る。条約締結後すぐに国王から輸出関税支払いの要求が出された。その結果、国王にピクル当り四分の三レアルの関税が支払われることになり、コシヨウ価格も売却者と取決めることとされた。⁽⁹⁴⁾結局、コシヨウ価格を固定化することはできなかったわけである。また六三年にはシャバンドル等から彼らに従来認められてきた秤量手数量を支払うことの要求が出され、これも認めざるをえなかった。⁽⁹⁵⁾こうして価格固定も関税及び手数料の免除も条約締結後一年のうちに全く有名無実化してしまった。従って国王としては取引きにおける価格操作の自由を再び取り戻したことになる。国王は早くも六三

年に出荷制限をしてコシヨウ価格の釣り上げを図っている。⁽⁹⁷⁾未だパレンバン王国は交易において完全に会社に従属してしまつたわけではなかったのである。

会社との和平後約二〇年間、パレンバンは対外関係においても国内問題においても比較的平穩に恵まれた。四六年のマタラムと会社の和平以後はマタラムか会社かの二者択一に悩む必要はなくなり、マタラムとの主従関係は継続された。けれどもその関係は必ずしも親密であつたわけではない。五〇年代末からマタラムは外部の貢納国との紐帯を強化しようと図り、これら諸国王自身の表敬出府を要求するようになった。⁽⁹⁸⁾そのため、六四年及び六八年にパレンバン国王はマタラムへ使節を派遣するが、いずれも国王自身ではないことやまたは使節が国王を代理するにふさわしい身分でないことを理由にその受入れを拒否されている。⁽⁹⁹⁾それでもなお国王自身が出府することはなく、貢納を追加するなどして許されている。従って、貢納関係は維持されたが、それはマタラム国王の意に反して多分に儀礼的な性格へと変質し、両者の絆は弱まる傾向にあつたと言える。

パレンバン国王は七一年頃からスルタンの称号を用い始めるのだが、それについてスフリーケは、パレンバンとマタラムとの結束の断絶を意味すると述べている。⁽¹⁰⁰⁾もっとも、スフリーケがそれに続けて述べているように、これを機に両者の関係が完全に断たれたわけではない。それどころか、七七年、トゥルノジョヨの反乱鎮圧のための援軍をマタラムから求められると、会社の反対を押して一〇隻から成る艦隊を国王は派遣している。この艦隊は結

局何もせずに空しく帰還するのだが、いわばこれがパレンバン王国のマトラムに対する最後の御奉公となった。マトラム王国はもはや自力でトゥルノジョウの反乱を鎮められず、会社は非常に有利な条件と交換でその支援を仰ぎ、その軍事力によってかろうじて反乱を平定する有様だった。ジャワの中心王朝がその栄光と權威を失うことは、それを核として築かれてきた伝統的支配関係の崩壊を意味した。こうしてパレンバン王国とマトラム王国とを結んでいた儀礼的な絆も徐々に弱まり、一六八八年の遣使の後、断絶するに至ったと考えられる。

他方、会社との取引関係は六二年条約締結後一〇年ほどはさほどの曲折なしに続けられた。だが七三年会社は国王に対し、国王自らコシヨウを他国へ密輸出していると非難し、条約の遵守を促している。⁽¹⁰³⁾ 国王の密輸出への非難は翌年にも為され、会社は何らかの対策の必要性を論じている。⁽¹⁰⁴⁾ またパレンバンのコシヨウ供給地としての価値も高まりつつあった。スマトラ東岸最大のコシヨウ供給地たるジャンビは、六〇年代末から七〇年代においてジョール王国との敵対抗争から、その小艦隊による襲撃をくり返し受けてコシヨウの安定的供給が不可能となった。これに対しパレンバンはその間国内におけるコシヨウ生産が順調に拡大し、動乱のジャンビを避けてミナンカバウ方面からのコシヨウ流入も増加した。⁽¹⁰⁵⁾ 従って会社にとりパレンバンにおけるコシヨウ独占は緊要な課題となってきた。その上、七七年頃にはヨーロッパ市場におけるコシヨウ価格の下落の故に、会社はコシヨウ買い上げ価格の引き下げを何とかして図る必要に迫られていた。⁽¹⁰⁷⁾

こうして会社はパレンバンにおける、低価格で、より効果的なコシヨウ独占を目論み、七八年初めから新条約締結のための交渉を開始する。それは四月にいちおうの結論を得て調印されるが、⁽¹⁰⁸⁾ その後会社は更に交易制限強化のための再交渉を進めた。その結果、四月調印の条約を一部改め、それに新たな条項を付加した新条約が七月に調印された。⁽¹⁰⁹⁾ ここではこれを一貫した六二年条約の改訂作業と見て、七月調印の条約に基いて考察を進めることにする。以下この七八年条約における改変の特徴を見てみよう。

先ずコシヨウの独占取引が一段と強化されたことである。国王が他国に派遣する使節に贈り物として携帯させるコシヨウは年に一〇〇〇ピクル以内と制限された。⁽¹¹⁰⁾ それを除きパレンバンで生産されたあるいは搬入されて来るコシヨウは全て会社によってのみ取引・輸送されることになり、その取引相手も国王が指定する四人の商人に限定された。従来パレンバンでのコシヨウ取引に加わっていた会社外の商人は全て取引・輸送から締め出された。これは当時会社の意向に反してコシヨウを高値で買い上げ、相場を引き上げていると見なされた自由市民による取引を排除することが狙いであった。⁽¹¹²⁾

そしてこのコシヨウ買い上げ価格は一ピクル当り現金で三レイクスダールデルス、⁽¹¹³⁾ 商品で三と四分の一レイクスダールデルスに固定され、半額ずつそれぞれ現金と商品とで支払われることとされた。また四分の三レイクスダールデルスの輸出関税とシャバンダルへの秤量手数料の支払いが明文化された。六二年条約の価格固定化は既述のとおりすぐに有名無実化したが、会社は関税をも

含めた価格を四及び四と二分の一レアルに抑えようと努めていたことは確かである。従って今度の条約によって定められたコシヨウ価格は関税を含めて考えればさほどの値下げにはなっていない。また一年ほど前に希望していた価格と比べても少し高値で決着している。余りの安値が密輸を増加させ、独占体制が崩れることを恐れたためであろうか。

更にこの条約の持つもう一つの重要な意義は許可状政策導入による交易制限である。⁽¹¹⁷⁾パレンバン⁽¹¹⁸⁾の住民が他国へ行く時は必ず会社の商館長より許可状を受領し、帰国時にはそれを提示し、輸入品を申告すること、時に臨検もされること、またインド各地の織物⁽¹¹⁸⁾とアヘンの輸入は会社を除けばパレンバン人以外許さないこと、その他の品目ならばいかなる者も持ち込みを妨げられないことが規定された。会社の言わばドル箱輸入品もやはりその独占下におくことがここに定められた。また条約には明記されていないが、パレンバン人の交易地はビマ、マカッサル、ティモール及び他の東部地方には許されなかったことが確かなように、これはその交易地をも明らかに制限するものであった。

これらの外に一見何の変哲もない条項も入れられている。総督が望めば国王はスンサンを往来するオランダ人のために休憩所の建設を許すというものである。⁽¹²⁰⁾しかし、その真の狙いは別の所にある。『バタヴィア城日誌』の記録者がこの条約を評した中に次の一文が見られる。

他の密売屋やコシヨウ密輸者をも封じ込めてしまうことは、一人のオランダ人を常駐させることができるようにされたス

ンサン河口を除いて、他の二つの河口あたりを回航するに必要の小舟を持てばそれは容易に行える。⁽¹²¹⁾

ここから明らかのようにこの休息所はオランダ人が常駐し、密輸を監視するための場所であった。

この結果、条約の上ではコシヨウ輸出が会社自体によって独占され、その上インド産織物の輸入も会社以外の外国人商人に対して禁止され、輸出入における会社への従属をパレンバンはより一層強いられることになった。しかし、会社にはこの条約を国王に完全に守らせるだけの余裕は当時なかった。条約締結後間もない頃に、既に国王や王子が率先して他国へコシヨウ貿易船を送っているのを知りながら、国王に条約の遵守を説得するのみで何ら強制を加えることができずにいた。⁽¹²²⁾

国王が会社による交易独占に屈服を余儀なくされるのは同国の内紛とジャンビとの対立の結果である。八〇年、パレンバンでは国王の長子で王位継承者であるパンゲラン・アディパティに対し、第二子のパンゲラン・アリアが次期王位の篡奪を企てて公然と反逆していた。⁽¹²³⁾このアリアはジャンビを追われたマカッサル人傭兵隊をパレンバンに引き入れ、兄に対し武力的な威力を加えていた。⁽¹²⁴⁾ところがそのマカッサル人部隊がジャンビのジョホールへ向けた使節隊を襲撃するという事件を起こした。⁽¹²⁵⁾その結果、パレンバンは内紛どころではなく、ジョホールと結んだジャンビの攻撃に備えることを余儀なくされた。⁽¹²⁶⁾それに要する莫大な戦費は当然会社からの借金によって賄われた。八一年初めパレンバンは先制してジャンビを攻めるが大敗を喫し、四月には逆に河口各地を

ジャンビ軍に荒されている。その後両者の小競合いが続くが、五月に会社の仲介で戦闘は終了する。

パレンバンは五月に会社が仲介に乗り出した当初、なおジャンビとの戦争継続に固執していたが、会社の武力行使を臭わせた説得でしぶしぶ和平交渉に応じた。しかし、その際受諾させられたのは和平交渉に応じることのみではなかった。八一年五月一八日付けでまた新しい条約を結ばされたのである。⁽¹²⁷⁾そこでは先ず、パレンバン王国が今回会社から得た借金の返済のために月々五〇〇〇レイクスダールデルスをコシヨウまたは関税で支払うこと、次いで国内に居る全てのマカッサル人その他の傭兵部隊を会社へ引渡すことという、今回の戦争処理に関する取決めが為されている。次いでパレンバンにとってより重要な意味を持つ前条約からの改訂が為される。先ずインド産織物及びアヘンの輸入が会社の方に限られ、パレンバン人に対しても禁止された。これによって会社はパレンバンにおける主要な交易を全く独占することが可能となった。そしてそれを有効に保つために、違反を見つけた場合その品物を国王と会社とが半々に没収することと定め、違反取締まりに対する国王の意欲を刺激している。更にこれまで会社臣民にしか及ばなかった会社の司法権を、パレンバンに居住・来港する全ての外国商人にまで対象を拡大すること、国王が使節派遣に際してコシヨウを贈り物とできるのはバタヴィアとマラッカ、つまり会社に対してのみに限ることを定め、外国商人及び国王による密輸を抑止しようとしている。

この条約によって、パレンバンがコシヨウの輸出、インド産織

物とアヘンの輸入という主要な交易において会社に独占権を握られ、その交易支配体制下に最終的に組み込まれてしまったことは確かである。ただし、パレンバン王国が以後この体制に易々諸々と屈してしまつたわけではない。九〇年に新たな条約締結が問題とされるが、その際国王は、外部から来港した全ての船との自由な取引、全ての外国人についての司法権等を要求し、⁽¹³⁰⁾交易の自由を取戻す意図を見せている。結局この努力は実らず、九一年一月に、七八年条約と八一年条約による改訂とを集大成し、商品によるコシヨウ価格を三と八分の五レイクスダールデルスに改訂したのみの条約を押し付けられてしまふ。⁽¹³¹⁾それでもなお九〇年半ばには、アヘン輸入の禁止、外国人に対する司法権の回復を執拗に要求し、それに成功している。⁽¹³²⁾

しかしながら、これも一時的なことにすぎず、一八世紀初め王位継承をめぐる内紛において国王が会社の支援を得た結果、一七二二年に承認を余儀なくされた条約で、アヘンの輸入権も外国人に対する司法権も会社に取り戻されてしまった。その上、一七一〇年頃から生産が始まったバンカ島の錫の取引も独占権も会社がいち早く握られている。そして更に、条約に反する密貿易を防止するために、会社の望む至る所に監視所を設置し、臨検にシャバダールが協力することを承認させられた。要するに、この条約はこれまでのパレンバンにおけるコシヨウを中心とする会社の交易支配体制を再確認し、監視強化によるその維持を定めたものであり、いわばその体制を完成させたものである。しかし皮肉なことにこの時期を境にしてパレンバンにおける交易の主役はコシヨウ

から錫に交替してしまうのである。

おわりに

以上パレンバン王国の建国以来一世紀余の対外関係について見てきた。この間の同国の対外関係の歴史には二つの大きな節目を指摘できるだろう。一つは一五九六年のパレンバン王国による侵攻であり、もう一つは一六五八・九年の会社との敵対・戦争である。

パレンバン王国による侵攻はパレンバン王国の以後約半世紀にわたる対外姿勢を大きく規制することになった。同王国はこの侵攻によって自己の弱小さを徹底的に認識させられたであろう。その認識がこのような外からの脅威に対して自国の安全保障をいかに確保するかという問題を導いた。それに対して同王国がだした答えが他国との同盟であり、強国による庇護であった。一六一〇年代・二〇年代におけるジャンビとの同盟及び会社への接近は前者であり、二七年にマタラム王国の宗主権を承認し、その保護下に入ったことは後者である。

三〇年代後半において、マタラムと会社という二つの互いに敵対する大勢力と、共に親交を結ぼうとする危険な試みを敢てしたことも、言ってみればこの弱小認識からくる小国的安全保障対策である。けれども会社との親交の目的は安全保障のみではなかったろう。弱小な沿岸交易国にとって、巨大な商業勢力である会社との関係強化は自国の交易拡大の絶対的条件であると考えられた

はずである。危険な二股的外交を敢て推進した背景にはこうした考え方もあったと思われる。実際、四二年条約による会社との疑似的同盟関係はパレンバン王国の交易拡大を導いた主要因の一つであったと言える。

そして四〇年代後半から五〇年代前半にかけて、パレンバン王国はコシヨウ交易国としてある程度の発展を示し、その発展を背景に、また更なる飛躍のために交易の自立化を目指した。この間、同王国を取巻く環境にも変化が生じていた。四六年にマタラムと会社が平和を結び、ジャンビによる王位継承への干渉も四一年以降止んだ。宿敵パレンバンは往年の勢力を失い、パレンバンへの敵意も薄らいだ。逆に五七年にはジャンビ、ジョホールを加えた四国間に大いなる親密さの存在が報告されてもいる。こうした変化はパレンバン王国をして自国の安全保障対策に切実性を欠かせる結果をもたらした。それは会社への依存関係の切断に最も明白である。この安全保障を不必要とする認識と、会社の四二年条約不履行とを考えれば、同王国が安全保障と交換に許した会社のコシヨウ独占を否認し、交易自由化を進めようとしたことは当然であった。

パレンバン王国が五八・九年に会社と敵対・戦争に至る事情は以上のように理解できる。しかしその結果は敗北に終り、同王国は交易における会社の支配体制下へ組込まれてしまう。それでもなお、条約の不備や条約規定履行を迫る会社の強制力の欠如等を利用して、支配・独占を潰崩しにするという形態で抵抗を続けた。だがそれらも内紛等に際しての会社への依存を機に段階的に

封じ込められ、従属も強化されていた。

ではこうした敗北・従属を余儀なくされた要因は何処に求められるか。それは単に対外関係からのみ究明されるような問題ではなく、むしろ沿岸交易国たるパレンバン王国が本来的に保有せざるをえなかった国内的な諸要因に多くは帰せられるだろうと筆者には考えられる。それ故に、対外関係のみに対象を限定して論じてきた本稿においては、この問題についての解答を留保せざるをえない。筆者の次の課題として稿を改めて論じることにした。

註

Abbreviation

BKI. ; *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië.*

IG. ; *De Indische Gids.*

TNI. ; *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië.*

VKI. ; *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut van Taal-, Land- en Volkenkunde.*

Bouwstoffen. ; P. A. Tiele en J. E. Heeres, ed., *Bouwstoffen voor de Geschiedenis der Nederlanders in den Maleischen Archipel.* 's-Gravenhage, 1886—1895. 3deels.

Coen. ; Colenbrander, H. T., ed., *Jan Pietersz Coen* ;

Bescheiden omtrent zijn bedrijf in Indië. 's-Gravenhage, 1919—34. 7deels.

Corpus Diplomaticum. ; Heeres, J. E. en F. W. Stapel, *Corpus Diplomaticum Neerlandicum: Verzameling van politieke contracten en verdere verdragen door de Nederlanders in het Oosten gesloten ; van privilegebrieven, aan hen verleend.* 's-Gravenhage, 1907—1939. 5deels.

Dagh-Register. ; *Dagh-Register gehouden int Casteel Batavia vant passerende daer ter plaatse als over geheel Nederlands-India.* 's-Gravenhage. 1887—1919. 29deels.

Generale Missiven. ; W. P. Coolhaas, ed., *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan Heren VII der Verenigde Oost-Indische Compagnie.* 's-Gravenhage. —1979. 7deels.

Opkomst. ; Jonge, Jhr. J. K. J. de, &, ed., *De Opkomst van het Nederlands gezag in Oost-Indië.* 's-Gravenhage en Amsterdam, 1862—1909. 13 deels.

- (1) Leur, J. C. van; *Indonesian Trade and Society. Essays in Asian Social and Economic History*. The Hague, 1967. pp. 104—107.
- (2) Benda, H. J.; "The structure of Southeast Asian History: Some Preliminary Observations". (*Journal of Southeast Asian History*. No. 3 (1962), pp. 106—138.) p. 113.
- (3) van Leur, ; op. cit., p. 105. このファン・レールの基礎概念をもとに、ブロンソンはこのような沿岸交易国についての理念的モデルを提示している。(Bronson, B.; "Exchange at the Upstream and Downstream Ends. Notes toward a Functional Model of Coastal State in Southeast Asia." Karl L. Hutterer, ed., *Economic Exchange and Social Interaction in Southeast Asia*. Ann Arbor, 1977. pp. 39—52.)
- (4) シュリーヴィジャヤ Sivijaya 王国の研究史及びそれらの問題点、更には近年の発掘調査結果に基く数多の疑問点等については次の論文が大いに参考になる。深見純生「シュリーヴィジャヤ研究の動向——文字資料と考古学史料の落差——」『東洋史研究』第四〇巻三号（一九八一年二月）五四八頁—五六一頁。
- (5) Schrieke, B.; *Indonesian Sociological Studies*. The Hague, 1966. Vol. 1, p. 16.
- (6) この攻撃・占領の年は漢文史料の従来の読み方から一三七七年とされてきたが、ウォルターズはこの年に直ちにこれが為められたと読むのは誤りで、実際には一二九七年の数年前と考えられることを述べている。(Wolters, O. W.; *The Fall of Srivijaya in Malay History*. Kuala Lumpur, 1970. pp. 49—76.)
- またこれ以前、一二八〇年代にやはりジャワのシンゴサリ Singasari 王朝によりこの地が攻撃・支配されたとのジャワの伝承もあるが詳細は不明である。(Schrieke, ; op. cit., Vol. 1, p. 16.)
- (7) このパレンバンにおける華僑集団についての研究はこれまでも数多くなされている。この問題を専論し、まとめているものの一つとして次が上げられよう。和田久徳「十五世紀初期のスマトラにおける華僑社会」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第二〇号（一九六七年）六二頁—八九頁。
- (8) パレンバン地方には大略、マジャパイト王朝時代に領主として王子の一人、アルヤ・ダマル Arya Damar またはアルヤ・ディラー Arya Dilah が派遣され、代々その子孫が同地を支配したという内容の伝承がある。マジャパイト王朝から派遣された代官の一人が土着・世襲領主化した事実を反映した伝承と考えられる。("Schetsen van Palembang." TNL. Vol. 9, No. 3. pp. 281—376. pp. 353—354, Sturler, W. L. de; *Proeve ener Beschrijving van het Gebied van Palembang (Zuid-oostelijk gedeelte*

van Sumatra). Groningen, 1843. pp. 4—5.)

またトメ・ピレスのマジャパイト王朝による支配に関する「パリンバン」の国は自分たちで代々異教徒の王をいただいており、またジャオアの異教徒の王に服従していた」という記述もこの事実を示している。(トメ・ピレス著、生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳註『東方諸国記』岩波書店 一九六六年 二八一頁。)

(9) トメ・ピレスはデマ王国の占領支配についてごく簡略に「ジャオアのイスラム教徒のパテたちが海岸に君臨するようになると、かれらはパリンバンと長い間戦ってその国を奪った。〔それから〕国王はおらず、パテがいるだけになった。このパリンバンには重要なパテが十人ないし十二人いる。」と述べている。なお「パテ」は「地方領主」と考えてよい。(トメ・ピレス 前掲書 二八一—二頁)。

(10) パテ・ウヌス Pate Unus または Yunus はジャパラ Japara の領主であるが、この当時ジャパラはデマ Demak 王国に属していた。ウヌスの名はポルトガル史料にのみ現れ、ジャワの伝承にその名は無い。ジャワの伝承中に見られる、当時のスルトアンの義弟であるパンゲラン・サブラン・ロル Pangeran Sabrang-Lor がこれに当ると考えられる。(Graaf, H. J. de, en Th. G. Th. Pigeaud; *De Eerst Moslimse Vorstendommen op Java; Studien over de Staatkundige Geschiedenis van de 15de en 16de Eeuw.* (VKI. 69.), 's-Gravenhage, 1974. pp. 43

—47.)

パテ・ウヌスのこの遠征についての記述は、トメ・ピレス、前掲書、二八一—二頁。ジョアン・デ・バロス著、生田滋訳註『アジア史 二』岩波書店、一九八一年、三〇三—三一九頁に見られる。

(11) トメ・ピレスは「パリンバンには約一万人の住民がいるが、それらの人々の多くは、マラカの戦争でわれわれに敵対して命を失った。」「パテ・オヌスが敗れた時にこの国もわれわれによって破壊され、そのジュンコやシャンパナも破壊され、またパリンバンの領主たちも殺されてしまった。」とその被害を記している。この「ジュンコ」はジャンク、「シャンパナ」はサンパン Sanpan という櫓で漕ぐ小舟をさす。また「領主」は註(9)の「パテ」に当る。(トメ・ピレス 前掲書 二八二頁)。

(12) パリンバン王国の歴史に関する詳細な研究には次がある。Roo de la Faille, P. de; "Uit den Palembangischen Sultanstijd." *Feestbundel uitgegeven door het Koninklijke Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen bij Gelegenheid van zijn 150 Jarig Bestaan 1778—1928.* Weltevreden, 1929. dl. 2. pp. 316—352. 管見ではこれが唯一と言ってもよいく、これを超える研究は未だない。彼は二種の伝承から、デマ王国の崩壊後ジャワを逃れた王族・貴族らがパリンバン王国を創建したこと、その時期はイスラム暦九八一年で、ヨーロッパ史料から確

実な一五九六年のバンテン王国によるパレンバン王国侵攻以前であることを考証した。ところが、彼はイスラム暦の西暦換算で単に六二二年を加算するという誤りを犯し、イスラム暦九八一年を西暦一六〇三年としたため、「一五九六年以前の建国」という命題と矛盾し、この伝承中のイスラム暦九八一年を誤りと断定せざるを得ず、結局これを考証に生かすことができなかった。

次いで、デ・フラーフが彼のマタラム王国史研究の中でこの問題に触れ、他の史料をも考証に加えて前者の説を大略良しとし、更にイスラム暦九八一年を西暦一五七二／三年と正しく換算すれば時期的矛盾が排され、この頃パレンバン王国が創建されたと考えてよいことを指摘した。

Graaf, H. J. de; *De Regering van Panembahan Senapati Ingalaga*. (VKI. 13.) 's-Gravenhage, 1954. pp. 64—67. しかし、デ・フラーフの換算も誤りで、正しくは一五七三／四年でなければならない。またアフマッド・カーンは一九五六年に入手した七種のパレンバン王国の伝承に基く年代記を資料に、同王国の王統・系譜の整理を試している。各国王の名称とその系譜に関してはある程度の信頼がおける。しかし、王国の始源をさほどの根拠もなく一五五〇年と断定し、それを起点に年代記から割出した各国王の在位年数を、機械的に系譜に沿ってそれぞれの国王に割りふったため、各国王の在位年代が著しく事実と齟齬する結果を招いてしまった。ただし、この論文によってパレン

バン王国の建国伝承には、同名のキヤイ・ゲデン・スロ Kjahi Gedeng Sura 兄弟を始祖とする系列と、一人のキヤイ・ゲデン・スロのみを始祖とする系列との二種あることを筆者は知りえた。(Muinud-Din Ahmad Khan; "The Sultanate Palembang". *Journal of the Asiatic Society of Pakistan*. Vol. 8. No. 2 (Dec. 1963), pp. 33—52, Vol. 9. No. 2 (Dec. 1964), pp. 31—44.) なお本論文の入手にはインド留学中の中里成章学兄の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

(13) Graaf en Pigeaud; op. cit., pp. 201—205.

(14) Ibid., pp. 201—205. 彼らはデマ王国崩壊に際するジャワの王族・貴族の亡命政権がパレンバン王国の起源とする従来の説を継承発展させている。パレンバン王国に「ジパン Jipang 国王の法」が施行されていた事実を根拠に、この亡命者キヤイ・ゲデン・スロをジパン王家に関係する者と解釈した。なお、この論文においてもイスラム暦九八一年を西暦一五七二／三年とする誤りはくり返され、スロ二世の在位年代を「一五七二年頃から」としているが、筆者の判断により、これを「一五七三年頃から」と訂正しておいた。

(15) Ahmad Khan; op. cit., Vol. 8. No. 2. pp. 33—52.

ロー・デ・ラ・フェイユが主に拠ったのもこの系列であると考えられる。Roo de la Faille; op. cit., p. 317. 註

(12) 参照。

- (16) Meilink-Roelofs, M. A. P. ; *Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630*. The Hague, 1962. p. 144.
150. 永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社、一九七一年、一二三—五頁。
- (17) 生田滋「東南アジアにおける貿易港の形態とその機能——十七世紀初頭のバントムを中心として——」『世界の歴史13・南アジア世界の展開』筑摩書房 一九六一年 二五五—二七〇頁。
- (18) トメ・ピレスは当時の繁栄について「パリンバン（注18）の国はパテ・ロディン（注19）「デマ国王——引用者」の持っている最良のもので、彼自身の国よりもよい。」といささか過大評価ともとれる記述を残している。そして、その住民によるマラッカとの取引については次のように記している。
- マラッカへは毎年十隻あるいは十五隻のジュンコが白い米とよい野菜をたくさん積んでやって来ていた。この米は主要な商品である。また商品として多くの奴隷がいる。木綿も大量にあり、籐も大量に持っており、若干の黄金、大量の粳米もあり、樹脂、鉄もある。多量の蜜蠟、蜂蜜、酒、多くの肉、にんにく、玉ねぎに至るまである。かれらは「これらの商品を」大量に運んで来るが、それはよい商品である。また多量の黒い安息香もあり、これはボヌア、マルカサル（注20）「マカッサル」、タンジョンプラ（注21）「ボルネオ南岸をさす」および
- その他の島々で用いられる。（トメ・ピレス 前掲書 二八二頁）。
- この大量の米がパレンバン産なのかそれともジャワ米の再輸出なのか、彼の記述からは不明であるが、一七世紀以降のパレンバンは米を他所から輸入していることから考えれば、ジャワ米の再輸出の蓋然性は高いと言えよう。
- (19) 註(18)の引用文参照。またスフリーケは一四世紀末のパレンバンについてだが、「自らは森林物産の他何ら特別な産物を持たない」と評している。（Schrieke, ; op. cit., Vol. 1. p. 17.）
- (20) 拙稿「バンテン王国支配下におけるランポン地方社会の変容」『東南アジア——歴史と文化——』五号 一九七五年 九五—一二二頁参照。
- (21) Djajadiningrat, Hoesein ; *Critische Beschouwing van de Sedjarah Banten*. Haarlem. 1913. pp. 147—149. 151—153. 161—163.
- この伝承の内容についてフラーフとピジョーはこれが事実の可能性のあることを示唆している。パレンバン王家がジパン王家の末裔とするなら、ジパン領主（王）アルヤ・パンサン Arya Panangsang は、デマ国王にしてパンゲラン・マス Pangeran Mas の甥であるパンゲラン・プロウォト Pangeran Prawata を討ち、デマ王家に災厄をもたらしたのだから、パンゲラン・マスがジパン領主家の血を引くパレンバン王家に復讐しようとする可能性は十分に

あると言う。またジパン王はもともとデマ王国に服属していたのだから、やはりその末裔をデマ王家のマスが奴隷と呼ぶことも可能性はありうるとする。ただし、この伝承にあるパレンバン王スロはキャイ・ゲデン・スロ二世（一五七二—一八九年）である可能性はなく、多分パレンバン王は代々スロの名乗りを持っていたと解すべきだろうとの考えも示している。（Graaf en Pigeaud; op. cit., pp. 203—204.）

- (22) Meilink-Roelofs; op. cit., pp. 152—153. Schrieke; op. cit., Vol. I. p. 46.

- (23) フロイン・メース著、松岡静雄訳『瓜哇史』岩波書店 一九二四年 二八三—四頁。

- (24) 一五九六年には敗退後間もなく来港したハウトマン Houtman, Cornelis de に対し（渋沢天則訳、生田滋註『ハウトマン、ファン・ネック 東インド諸島への航海』岩波書店 一九八一年 一一六頁）、一五九八年にはファン・ネック Neck, J. C. van に（前掲書 三四〇頁）、一六〇五年にはバンテンの会社商館長に（フロイン・メース前掲書 二八四頁）それぞれ要請している。

- (25) Tiele, P. A.; “De Europeers in den Maleischen Archipel.” part 8. BKl. (dl. 35, pp. 257—353), pp. 305—306.

- (26) 当時のパレンバン国王パンゲラン・セダイン・プラ Pangeran Sedang Pura（一六〇九—一六六年）の娘ラト

ウ・マス Ratu Mas がジャンビの王子パンゲラン・ゲデー Pangeran Gedeh と結婚していた。（Generale Missiven. dl. 1. p. 160.）

- (27) 一六二五年、アチェー軍がジャンビを襲うとの噂が流れた際、パレンバン王国はジャンビに四〇〇〇人の援軍を送っている。（Ibid., p. 160.）

- (28) 本文4頁に指摘したようにバンテン王国の侵攻意図がパレンバンのみならずジャンビまでを射程に含んでいたと考えられるなら、対バンテン防衛同盟は当然考慮されていなければならない。

- (29) Coen; dl. 1. p. 157. また同年一〇月にはパレンバンを友人として遇するよう指令が出されている。（Ibid., dl. 2. p. 16.）

- (30) Ibid., dl. 1. p. 285.

- (31) Ibid., dl. 1. p. 510.

- (32) Corpus Diplomaticum. dl. 1. p. 347. 編者の解説による。

- (33) Coen; dl. 1. pp. 177—178. トメ・ピレスは、ここに名を上げられたパレンバン、ジャンビ、カンパル、その他インドラギリ等スマトラ東海岸において、一七世紀にコシヨウ供給地として知られる地域の産物・商品の記述中にコシヨウを上げていない。一六世紀当初、ミナンカバウのコシヨウはほとんど全てが西海岸に出荷されており、一六世紀半ば以降アチェー王国が西海岸を征服し、コシヨウ貿易独

占を図ったため、それを嫌ったミナンカバウ人がコシヨウを東海岸へ出荷するようになったと考えられる。(トメ・ピレス 前掲書 二七七—二八四頁)。

- (34) 一六一九年中、パレンバンに買い付けを指令したのは木材のみであった。(Coen; dl. 2. p. 630.) 一六三〇年三月のジャンビへの指令では、もしジャンビでコシヨウが入手できなかったらパレンバンへ回り、木材を買い入れることを命じている。(Ibid., dl. 2. p. 671)

- (35) Ibid., dl. 2. pp. 244—245.

- (36) Graaf, H. J. de; *De Regering van Sultan Agung, vorst van Mataram. 1613—1646, en die van zijn voorganger Panembahan Sedaing-Krapjak. 1601—1613.* (VKL. 23.) 's-Gravenhage, 1958. pp. 274—275.

- (37) パレンバン王家がジャワの支配階層に出自を持つことは既述したが、その宮廷では一九世紀初期のオランダによる征服まで、ジャワ語が用いられ、全てにおいてジャワの様式が維持されたと言われる。こうした王家及び貴族層のジャワの伝統への固執は、当然ジャワ旧来の支配体制やジャワ中心王朝の伝統的威信を重んじる態度へと結び付き、その傘の下へ進んで入ることを求めたと考えられる。

- (38) この王はパンゲラン・セダイン・キナヤン *Pangeran Sedaing Kinayang* と後世呼ばれた王で、統治年代は一六一六—一六二七年である。

- (39) このパンゲラン・アヌム *Pangeran Anum* は故パレン

バン王の姉妹ラトゥ・マスとジャンビ王子パンゲラン・ゲデーの長子である。

- (40) ラジャ・アディパティ *Raja Adipati* で、統治年代は一六二七—一六二九年。死後の呼び名はパンゲラン・セダイン・プサリアン *Pangeran Sedaing Pesarian* である。

- (41) Coen; dl. 5. pp. 32-33. MacLeod, N.; "De Oost-Indische Compagnie op Sumatra in de 17e eeuw." IG. Vol. 25. No. 2 (1903). p. 1256.

初めオランダはこの要請に応じるのを躊躇したが、イギリスがすぐさまこれを容れたので、対抗上オランダも応じたとされている。このエピソードは英蘭双方の対抗関係の鋭さを示すと共に、会社にとってパレンバンはジャンビと比較すべくもない地位にあったことをも示しているよう。

- (42) 女性問題によりその夫に殺されたと言われる。(Gene-rale Missiven. dl. 1. p. 247. MacLeod; op. cit., IG. Vol. 25 No. 2. p. 1257.)

- (43) ラジャ・ラデン・アリア *Raja Raden Aria* 治政は一六二九—一六三六年。死後はパンゲラン・セダイン・ラヤック *Pangeran Sedaing Rayak* と呼ばれた。

- (44) 註(42)に同じ。

- (45) 一六三〇年にジャンビの国王が亡くなると、その後を継いだパンゲラン・ゲデーも同年中に後を追って亡くなった。その継承権はいちおうアヌムにあったが、高官達の意向はアヌムをパレンバンの王位に即け、ジャンビの王位は

弟のパンゲラン・アディパティ・アリア Pangeran Adipati Aria に継がせようとするものであった。しかし、アヌムのパレンバン王位継承は成功しなかったため、形式的にはアヌムがジャンビの王位に在ったことになる。だが、政治の実権は母のラトゥ・マスが握っていたと言われる。

アヌムの死後王位は弟のアリアが継いだ。(Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 25. No. 2. p. 1259. 1923.)

- (46) Ibid., pp. 1913-1914. 後述するように、この年初めにマタラムの大艦隊が来港しており、それによるマタラムへの恐怖は未ださめきっていないと考えられる。

- (47) Dagb-Register, 1631-1634. p. 205.

- (48) Ibid., p. 269. この提案はバンテン王国に拒否された。

- (49) Ibid., p. 427.

- (50) Dagb-Register, 1636. p. 7. その艦隊の本来の目的地はマラッカであったが、会社艦隊による襲撃を恐れてこちらへ方向を転じたと言われる。

- (51) バタヴィアに本拠を置き、会社の許可状を得て交易に従事する商人の意である。本文9頁に引用した史料にも見られるように、中国人が多数を占めていたようである。

- (52) Ibid., p. 7. 81. 168. 三六年一月一五日には、パレンバン国王がそれまで犯してきたバタヴィア商人への差別に對し抗議するようジャンビの商館長に指令を発した。

- (53) Ibid., p. 45.

- (54) Ibid., p. 255. 多分、先のマタラム艦隊のパレンバン来

港とこの使節派遣とがジャンビにも脅威となり、会社よりもマタラムを選択すべきではないかとの考えを生じさせた。その結果、高官二名をパレンバンへ送り、このマタラム使節と交渉を持っている。

- (55) Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 25. No. 2. p. 1913. 1916.

ラデン・トゥムングン Raden Tumenggung. 前王との関係は不明である。しかし、三六年にジャンビのパングラン・アヌムの継承権主張を拒けた理由の一つに、血筋からいけばアヌムよりもこのラデン・トゥムングンの方が正統であることがあげられている。

- (56) Opkonst. dl. 5. p. CXIV, 236.

- (57) 以後本節で用いる「取引所」はいずれも「要塞として機能する取引所」の意味を内包している。

- (58) Dagb-Register, 1636. p. 189.

- (59) Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 25. No. 2. p. 1915.

- (60) Generale Missiven. dl. 1. p. 132.

- (61) Ibid., p. 132.

- (62) 既述のように、会社にとっての比重においてパレンバンはジャンビに抗すべくもなかった。

- (63) バンテンとは三八年以来なお断続的にランポン地方で交戦中であり、ジャンビからは前にも述べたとおり武力的脅しをもって、王位継承に干渉が為されている。

- (64) Corpus Diplomaticum. dl. 1. pp. 347-348. 合意内容は

前述の国王の要請と同じである。(本文7頁)。

(65) Bouwstoffen. dl. 3. pp. 20—21.

(66) Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 25. No. 2. p. 1924.

スフリーケは、会社が馬拉ッカを四一年初めに占領したため、マタラムは会社への対抗上外島貢納国への締め付けを強化したと述べている。この国王の表敬訪問もそれと関連があるかもしれない。

(67) Ibid., pp. 1927—1928.

「奇妙な勝利」というのは、双方の激しい会戦も無いのに、マタラムの数隻が逃げようとしてバンカ島岸に激突し、ジャワ人二、三〇〇人が死亡したためである。またパレンバンにはこの「海戦」についてマタラム側がオランダ船数隻を捕えたとの誤った情報が伝わり、国王らはオランダ艦隊の残りを追尾しようと言われ、準備をしたと言われる。これは国王の反会社会的態度を暗に示すものである。

(68) Ibid., pp. 1928—1929.

(69) Bouwstoffen. dl. 3. pp. 108—113. Corpus Diplomaticum. dl. 1. pp. 380—386.

なお⑤の関税額は、輸入織物の各種別に一枚、輸出コシヨウ一〇〇ピクルにつき一〇五レアル、即ち八〇レアルを国王、二五レアルをシャバンダル(港務長官)に支払うと定められた。また⑦のコシヨウの独占取引きの内容は、会社へ直接売るか、会社から許可状を得て、買ったコシヨウを必ず会社へ売却することが確かな商人と取引きすること

を意味する。

ピクル pikul またはピクル pikol は重さの単位、一ピクル = 一〇〇カッチー catty = 一二二・五オランダ・ポンド。レアル real は貨幣単位、この当時一レアル = 五〇スタイフェル stuiver = 二・五グルデン gulden。

(70) Bouwstoffen. dl. 3. p. 3. p. 112. Corpus Diplomaticum. dl. 1. p. 385.

(71) 国王は条約締結後すぐに取引所建設を会社に迫っている。(Generale Missiven. dl. 2. p. 195.)

(72) 註(70)に同じ。

(73) Dagh-Register, 1643-1644. p. 6. 19. 35.

(74) Bouwstoffen. dl. 3. pp. 283—284.

(75) Graaf; Sultan Agung. p. 277.

(76) この前は四二年の国王による直接訪問であるから二年しか間が空いていない。これぐらいの期間の遣使の空白は普通であるから、この間双方とも関係断絶を意識したことはなかったと考えられる。

(77) 例えば四八年にはマタラムとパレンバンが共同してバンテン領のシリム及び周辺を攻撃するとの噂が流れた。こうした噂の背景には双方の使節の往来など、特別な親密さを示す行動が考えられるだろう。(Dagh-Register, 1647—1648. p. 54.)

(78) Schrieke; op. cit., Vol. 2. p. 225.

(79) Bouwstoffen. dl. 3. p. 345. これは一六四七年の報告で

あり、会社とマタラムとは四六年に平和条約を結んでい
る。もっとも、四〇年代初めの頃からマタラムと会社との
敵対関係は実質的に消滅しつつあった。

- (80) 少し時期は遅れるが五七年の状況として「多くのコシ
ウが年間を通じてパレンバンからジョホールへ輸出されて
おり、そこからカンボジア、クイナン、中国へ行く。それ
は必然的に台湾の市場で我々を不利にする。」という報告
もある。(Generale Missiven. dl. 3. p. 157.)

- (81) Ibid., dl. 2. p. 823. dl. 3. p. 17.

- (82) Ibid., dl. 3. p. 218. これは一六五八年の報告である。

ただしこの部分は編者が原文書を要約した部分である。従
来の説では三六年に即位したラデン・トゥムングンは六〇
年に亡くなるまで統治したと考えられている。従って彼が
四二年に「コシウ独占の条約」を結んだ本人であり、
「彼の前の王が結んだ」は明らかに矛盾している。この間
に国王の交代があったのか、それとも当時の会社の報告の
誤りなのか、検討を要する。

- (83) Generale Missiven. dl. 3. p. 218. このオッケルス
Ockersz, Cornelis 等への襲撃が単に外国船のコシウ没
収に対する恨みからだけでは考えられない。これが計画的
な襲撃であったことから判断すれば、パレンバンは明確に
会社によるコシウ貿易への干渉を排除することを目指
し、会社との敵対をも考慮に入れていたと思える。五七年
頃、バンテン・ジャンビ、パレンバン、ジョホールの各王

国間で使節が行き来し、大いに親密な関係が現出してい
たことが報告されている。全くの推測に過ぎないが、当時の
バンテン王国は会社に対抗して貿易活動回復に努力してい
る最中であり、それを盟主とするまでは言わないが、何
かこれら諸国が同盟して会社に対抗するような交易勢力を
形成しようとしていたのかもしれない。パレンバンの会社
船襲撃はその早過ぎた突出かもしれない。それはともか
く、この襲撃を行わせた最大の理由がパレンバンの交易国
としての自立確保にあったことは確かであろう。(Ibid.,
dl. 3. p. 157.)

- (84) Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 26. No. 1. (1904).
pp. 802—804.

- (85) Generale Missiven. dl. 3. p. 321. Mac Leod; op. cit.,
Vol. 27. No. 2. (1905). pp. 1268—1269.

- (86) Dagb-Register, 1661. p. 87.

- (87) Ibid., p. 363.

- (88) Ibid., p. 78.

- (89) Ibid., p. 78.

- (90) Ibid., p. 376. また、港灣封鎖以来の経過については
Mac Leod; op. cit., IG. Vol. 27. No. 2 (1905). pp.
1268—1269.

- (91) 四一年一月の占領以来、会社はマラッカをバタヴィアに
次ぐ第二の基地として活用していた。

- (92) Corpus Diplomaticum. dl. 2. pp. 209—212.

- (63) Ibid., p. 210. 第二条にそれを定めている。
- (64) *Generale Missiven*. dl. 3. p. 417. これは条約を批准する際に国王から出された要求で、六二年一二月の報告に既にこの結論が述べられている。
- (65) *Dagh-Register*, 1663. p. 357. 従来認められてきた權利について六二年条約に何ら明記されていないことから、彼らはそれを得られなくなったようである。それ故、次の三種のものが支払われるよう要求した。碇泊費。ルバルバ ruba-ruba (輸入織物の一部)、秤量手数量。
- (96) Ibid., p. 472. 696. 前註(95)で要求されたうち後二者を認めたことは確かである。
- (67) Ibid., p. 63. 80.
- (68) Schrieke; op. cit., Vol. 2. p. 227.
- (69) *Dagh-Register*, 1664. p. 498. Ibid. 1668—1669. p. 121.
- (100) 史料的にそれを確かめられるのは、七一年三月一八日にパレンバン国王から総督に届けられた書簡の中で、国王が自らの名のりを、パンゴラン・ラト・スルタン・アブドゥル・ジェマル Pangoran Rato Sulthan Abdul Jemal と記したのが管見では最初である。(Ibid., 1670—1671., p. 278). この王は六〇年に即位したラデン・トゥムンゲンである。この後更に名を改めてアブドゥル・ラフマン Abdul Rahman と名乗る。一七〇六年まで生存するが、一七〇二年に讓位している。
- (101) Schrieke; op. cit., Vol. 2. p. 228.
- (102) *Dagh-Register*, 1677. p. 111. 167. 199. *Generale Missiven*. dl. 4. p. 193.
- (103) Ibid., 1673. p. 49.
- (104) *Generale Missiven*. dl. 3. p. 942.
- (105) Andaya, L. Y.; *The Kingdom of Johor, 1641—1728. Economic and Political Development*. Kuala Lumpur, 1975. p. 84—121.
- (106) MacLeod; op. cit., IG. Vol. 27. No. 2. pp. 1281—1283.
- (107) *Generale Missiven*. dl. 4. p. 192.
- 十七年の報告では、ヨーロッパ市場のコシヨウ価格の低さの故に、一ピクル当り二と四分の一プラス関税四分の三リアル、計三リアルでパレンバンのコシヨウを買い上げるものが希望されていた。
- (108) *Corpus Diplomaticum*. dl. 3. pp. 136—140. *Dagh-Register*, 1678. pp. 92. 177—181. 198.
- (109) *Corpus Diplomaticum*. dl. 3. pp. 140—142. *Dagh-Register*, 1678. pp. 439—441.
- (110) この条項は四月調印の条約では、「スルタンが他所へ使節を送る時には三または四隻のコシヨウを積んだ船を共に送ることが許される」とされ、年間の量にも制限が無かった。七月調印の条約でこれを大幅に規制したのは明らかに使節派遣を名目とする国王のコシヨウ輸出を阻止する目的

からである。(Corpus Diplomaticum. dl. 3. p. 138. 四月調印条約第四条)

- (111) この当時会社がパレンバンから得られると予測したコシヨウは年に三〇〇〇〇ピクルである。(Dagh-Register, 1678. p. 178.)

- (112) この条約(四月調印)を評して『バタヴィア城日誌』の記録者は「会社の貿易を掘り崩している自由市民をそこから締め出すことになった」と記している。(Ibid., p. 178.) 自由市民が会社の貿易を阻害することについては Generale Missiven. dl. 4. p. 110. Dagh-Register, 1678. p. 134. がある。

- (113) レイクスダールデルス rijksdaarders 貨幣単位、この当時はリアルと同価。註(99)参照。

- (114) Dagh-Register, 1663. p. 80. 三月二〇日の条に、パレンバンのコシヨウの市価は関税抜きで一ピクル四レイクスダールデルスだが、会社駐在員は三と二分の一まででしか買わないことを決めたとある。

- (115) 註(107)参照。

- (116) Dagh-Register, 1678. pp. 88—89.

- (117) この条項は四月調印のものではなく、七月調印の条約に第一四条として新たに付加された条項である。

- (118) これは「ムーアのまたはコロマンデルの、スーラットの、ベンガルの及びこれら沿岸から来る織物」と規定されている。(Corpus Diplomaticum. dl. 3. pp. 141—142.)

- (119) Generale Missiven. dl. 4. p. 276. 七八年条約における許可状政策導入を特に解説して、これら諸地域への交易禁止を明言している。

- (120) Corpus Diplomaticum. dl. 3. pp. 138—139. 四月調印条約第五条。スンサンはムシ川が大きく三つの支流に分かれて海へ注ぐ河口のうち最も主要なもの。今日、全く水上に大集落が営まれているが、多分当時から続くものである。

- (121) 註(112)の引用に続く部分である。

- (122) Generale Missiven. dl. 4. p. 338.

- (123) 一六七七年マカッサル王国が会社によって滅ぼされた後、一部のマカッサル人は一族を結集してインドネシア、マライ各地に進出していった。七九年ジャンビは当時バンテンに滞在していたダエン・マンギカ Daeng Mangika を首長とするマカッサル人集団をジョホールとの戦争における傭兵部隊として招いた。ところが、種々の事情からマンギカはジャンビで疎んじられ、退去先を求めることになった。これに渡りに舟と応じたのが、兄パンゲラン・アディパティ Pangeran Adipati と対立していたパンゲラン・アリマ Pangeran Aria である。(Andaya,; op. cit., pp. 115—121.)

- (124) Generale Missiven. dl. 4. p. 473. なお以下ジャンビとの和平に至るまでの経過は次に詳しい。MacLeod; op. cit., IG. Vol. 27. No. 2. (1905). pp. 1284—1285.

1591—1594.

- (125) Dagh-Register, 1680. p. 685.
- (126) これ以前、国王及びアディパティはアリアと結んだマカッサル人を、会社の力を借りて排除することを考慮し、打診していた。しかし、状況の変化により、この時期にはマカッサル人排除に手を貸そうとする会社の意向に反し、一転して対ジャンビ戦争のための頼もしい戦力として期待することになったのである。
- (127) Dagh-Register, 1681. pp. 226—230. 249—254. 331—335. *Corpus Diplomaticum*. dl. 3. pp. 267—270.
- (128) 負債の総額は同年九月に二二五〇〇レイクスダールデルスと算定された。(*Corpus Diplomaticum*. dl. 3. p. 285)
- (129) 傭兵部隊にはブギス人、ミナンカバウ人も混入していた。(*Ibid.*, p. 268.)
- (130) *Generale Missiven*. dl. 5. p. 460.
- (131) *Corpus Diplomaticum*. dl. 3. pp. 546—554.
- (132) *Generale Missiven*. dl. 5. p. 624.
- (133) パレンバン王位には一七〇二年以降、スルタン・アブドゥラフマンから譲位されたパンゲラン・アリア(兄のパンゲラン・アディパティは九一年に死亡)がスルタン・ラトゥッ Sultan Ratu またはスルタン・マンスール Sultan Mansur と称して即いていた。一七一四年の彼の死後、実弟のカマルッディン・パンゲラン・ラトゥッ Kamaruddin Pangeran Ratu が周囲から推されて即位した。しかし、

前王には妾腹ながらパンゲラン・アヌム Pangeran Anum なる息子があり、この継承に大いに不満を抱いた。アヌムはこの後不満分子を集め海賊等を働き、勢力を蓄え、何度か叔父のスルタンに挑戦した。一七一七年末、彼は突然スルタンに恭順の意を表明し、それが許されて、いちやく宰相として宮廷に迎えられた。その後、アヌムは着々と自らの勢力を宮廷内に扶植し、スルタンに譲位を迫るほどになった。この両者の対立は結局二年半ばに頂点に達し、武力衝突に至る。この間何度かにわたり会社から借金をし、武器を買い、会社の支援を求めたスルタンは、この戦いで最終的な勝利を得たが、逆にその求めた支援故に会社によって縛られることになった。

- (134) *Corpus Diplomaticum*. dl. 4. pp. 536—543.

(補注) Woelders, M. O.; *Het Sultanaat Palembang 1811—1825*. (VKI. 72), 's-Gravenhage, 1975. は表題の時期に関するパレンバン王国の歴史伝承の主要なものの原文とその蘭訳を主内容としている。けれども、彼はそのテキスト選択に際し、オランダの各機関が所蔵する各種ハンドライティング類を、ロー・デ・ラ・フェイユの使用した史料をも含め、網羅的に調査し、それらに入念な史料批判を加え、系統的な分類を行っている。それによってもこのことは指摘しうる。